

序

臨床医にとって、検査をオーダーしない日はないといえるほど、検査は頻用され診療に欠かせないものである。

にもかかわらず、多くの研修医、若手医師にとって、日々の臨床のなかで検査をどう使いこなしていくか、悩みはつきないようで、レジデントノートの編集部には、たくさんの質問、疑問が寄せられる。本増刊号「診断に直結する 検査の選び方、活かし方～無意味な検査をなくし、的確に患者の状態を見抜く！」は、このような研修医、若手医師の検査に対する疑問、悩みから生まれた企画である。

本増刊号では、いかにして診療に本当に役立つ検査を行い、適切に解釈・判断して診療を進めていくか、実際の臨床に活きる検査の活用のしかた、およびそのために必要な情報を特集したいと考えた。そのため、あえて体系的、網羅的に検査を概観するのではなく、「診療に直結する」疑問点を集めた構成にしてある。読者は、自分の疑問に一致する項目を拾い読みしてもよいし、読み物的に通読するのもよいだろう。執筆者は、いずれも臨床の現場で活躍されている臨床に造詣の深い先生方にお願いした。また、難易度を示して、レベル別の理解の助けとした。

さて、編集部に寄せられる疑問には、いくつか共通点がある。

まず、鑑別診断をたてて（仮説を作つて）、その鑑別疾患仮説を除外、確定するために検査するという考え方（診断推論のフレーム）がないために困っている疑問が多かった。また、入院時検査/フォローアップ検査などで予期しない異常が見つかった場合の解釈に困るという疑問も散見された。このため、第1章では、「検査の基本的考え方」として、検査の目的と、その背後にある目的に応じた運用の考え方について解説した。

次に、血液ガス・酸塩基平衡、電解質異常など、基本的な検査の読み方について解説を求める声も多く、第2章では、「内科医に必要な検査の基本的読み方」として、臨床医として知っておくべき基本的な検査の解釈の仕方、その検査で何がわかる/わからないについて解説した。

続いて各論の第3章「検査のここが知りたい」では、診断の全体的な流れのなかで検査をどう使うかという視点を中心に、臨床の現場でのピットフォールについても解説した。

最後の第4章は、「Advanced Lecture」として、最近のトピックスとなっている検査を取りあげた。

本書が、少しでも読者の検査に関する悩みを解消し、日々の診療の助けになれば幸いである。

2010年12月

名古屋第二赤十字病院総合内科部長
野口善令